

中国人日本語学習者による文末表現の 使用に関する考察 —断り発話を事例として—

朴 仙花

キーワード 「言いさし」表現、「言い切り」表現、接続助詞、人間関係、学習環境

1. 研究背景と研究目的

対人関係の調整機能を担っている文末表現は、日本語の会話において重要な役割を果たしており(池田 1995)、適切な文末表現を選択することによって「遠慮」と「察し」を特徴(古田 1996)とする日本語によるコミュニケーションをより円滑に進めることができる。日本語母語話者が会話に使用する文末表現は多岐に渡り、初級の日本語教科書にあるような「です」「ます」のような完結型の文形式は非常に少なく、むしろ多くの先行研究に指摘されているように、「けど」「から」「て」のような接続助詞で終わる表現で会話を進行させることが頻繁に行われている(岡田 1991;水谷 1989、1993、2001;白川 2008、2009)。「けど」「から」などで終わる表現とあいづちを挟んで、話し手と聞き手が共同に一つの会話を作り上げていくという日本的な独特の話し方は、「共話」(水谷 1993)的な話し方と言われており、例えば次の例(1)に示すようなものである(下線は筆者による)。

- (1) A: このあいだの話なんですが…
B: エエ
A: 三か月ぐらいあればと申しあげましたけど…
B: ハア
A: ちょっと事情がありましてて…
B: ハイ
A: もう少し時間をいただく…
B: ハア
A: わけにはいきませんか。

(水谷1993 : 4-5)

例(1)に見られるような、文末に用いられる「が」「けど」「て」は、本来先行文と後続する文との間で接続関係を示す働きを担っている接続助詞である。それにも関わらず、発話文の最後に用いられ、そこで発話が終わってしまうと、一見文末が省略されてしまったかのように見える。このような表現は、外国人日本語学習者には理解しにくい表現であり、日本語母語話者の話し方に対して、「理解しにくい」「失礼である」「曖昧だ」などといった否定的な反応が多く、適切な使用や理解が難しい項目であることがしばしば指摘されてきた。文末表現は、円滑なコミュニケーションを進めていく上で、相手への配慮を示す一方で、また逆にそれによって相手への配慮を欠いてしまう場合もあり、外国人日本語学習者が無意識のうちに使用した文末表現が不適切であった場合に、日本の文化やコミュニケーションの中で意図せぬ誤解や異文化間摩擦が発生する可能性が考えられる。

中国人日本語学習者は、国際交流基金の「2009年海外日本語教育機関調査」によれば、日本語学習者の中でその数が最も多く、さらに文末表現の適切な使用が特に困難であるとされている(彭2004:86)。本稿では、そのような中国人日本語学習者を対象とし、特に対人配慮が必要とされる「断り」の発話行為を事例として取り上げ、そこに見られる文末表現の使用実態を調査し、言いさし表現の使用傾向と、その原因を探っていく。

2. 文末表現の分類と先行研究

既存の文末表現を分析対象としている研究には、文体(丁寧体と普通体)や終助詞(よ、ね、よねなど)を取り上げているものが多く見られるが、本稿では、「言いさし」表現と「言い切り」表現とに分類して考察する。「言いさし」表現と「言い切り」表現の談話機能には、対人配慮や相手との人間関係の様相をより的確に反映できるということが従来から指摘されている。日本語の会話において「言い切り」(直接形)表現を用いると、その情報は話し手のなわ張り内だけに独占されていることを含意するので、好ましい印象を与えないと言われている(神尾1990)。一方の「言いさし」表現は、「相手への配慮や察しの心的態度の表れ」であり(柏崎1993:62)、「最後まではっきり言い切らないことによって、明言を避け、発話を緩和したり、相手に発話の機会を与える機能を持つ(宇佐美1995:35)」ことが指摘されている。また「言い切り」表現は自分の態度を明確に示す断定表現であるのに対して、「言いさし」表現は言語化を抑えた中間的な言語表現である。そして、談話の違和感の調査を行った柏崎(2001)において、文末が「言い切り」表現であると冷たく感じられ、「けど/が…」の

ような「言いさし」表現であることが、談話を和らげて相手に配慮した印象になっていることが指摘されている。

本稿でいう「言いさし」表現は、形式上、複文の主節が明示されず、何か省略されている発話文のことであり、「文や文章を最後まで言い切らずに、途中でやめる表現」(小池他2002:6)と定義する。そして「言い切り」表現は、「言いさし」表現に相対した意味で使われており、形態的に過不足ない統語的に完全な発話文のことを指し示す。「言いさし」表現の言語形式には「て」「から」「ので」「けど」などの接続助詞で終わる表現と疑問詞、副詞、引用助詞、名詞などで終わる表現が含まれる。「言い切り」表現の言語形式には命題内容(お願いがあります、頼みたい)をそのまま提示する表現や、それに終助詞(ね、よ)が付加された表現、または疑問形(～ませんか)で終わる表現などが含まれる。

これまでの研究には、文末表現や発話行為を対象とした考察が多数見られるが、外国人日本語学習者の発話行為における文末表現の使われ方を検討したものは少ない。その中で断り発話における日本語学習者の文末表現を取り上げた研究としては鮫島(1998)があげられる。鮫島によると、中国語話者はレベルが上がるにともない「言い切り」表現の使用が漸減し、「ので/から/て」などの理由・説明の表現や「けど/が」で終わる「言いさし」表現の使用が漸増し、「断り」を和らげようとする傾向が見られたという(鮫島1995:79)。ところがこの研究では対話者との親疎関係、上下関係などの要因を排除しているため、学習者が相手との関係をどのように認識して回答しているかは不明である。本稿では話し手が相手との関係をどのように認識しているのかという点にも着目していく。また、「文末表現の習得には、言語能力と、目標言語社会での十分な言語接触を提供する滞在期間が必要である(峯2008:124)」ということが指摘されており、目標言語による十分なインプットがない学習者と十分な学習者が文末表現をどのくらい知っているのかという知識レベルの把握が必要であると考える。さらに本稿では日本語母語話者との使用傾向の比較を通して両者の相違点を明らかにし、その要因を追及する。

3. 調査方法

本稿では、2008年10月から11月にかけて行なったDCT調査を分析データとして用いる。確かにDCTのような記述式の調査方法では、相手の反応をみることができず、発話行為を相互行為としてとらえることが難しく、また被験者が日常生活の中で実際に記入した通りの発話を産出するとは限らず、これらが実際の発話とは異なる可能性があり、データの自然さの点で限界があることは否めない。

しかしこのような限界があるにしても、必要とする資料を短時間で多数の被験者から効率的に収集することが可能で、またデータ内容に影響を及ぼすと思われる上下、親疎関係等の社会的変数を実験的に統制することができるという利点がある。また、被験者が実際の会話において記述したとおりの発話をしなかったとしても、話し手のもつ語用論的知識や社会言語学知識を知る上では有効な手段である。以上の考えに基づき、本稿ではデータの収集にあたりこの方法を採用することにした。

本稿で行った調査における被験者は中国の大学に在学中の大学4年生の中国人日本語学習者51名（Japanese as a foreign language、以下JFL:男性13名、女性38名）、日本の大学に在学中の中国人日本語学習者19名（Japanese as a second language、以下JSL:男性3名、女性16名）であり、調査時点で全員日本語能力試験2級以上の習熟度を有する中上級レベルの学習者である。学習者をJFLとJSLに分けたのは、文末表現の選択に学習環境による相違が見られるかどうかを検証するためである。なお、比較対象として、日本の大学に在学する日本語母語話者の大学（院）生35名（以下JNS:男性13名、女性22名）に対しても同じ調査を行った。DCT調査では、先行研究（柏崎1993、鮫島1998、柴田・山口2002など）を参考に、上下、親疎という異なる人間関係を軸にした相手関係を組み合わせ、次の表1に示すような断りの発話行為を取り上げた。

表1 断り発話の内容と相手との人間関係

No.1	目上・親（教員）	アルバイトの紹介を断る
No.2	同等・親（友人）	アルバイトの交替依頼を断る
No.3	目下・親（後輩）	レポートの添削依頼を断る
No.4	目上・疎（教員）	アルバイトの紹介を断る
No.5	同等・疎（同級生）	パーティーの誘いを断る
No.6	目下・疎（後輩）	レポートの添削依頼を断る

調査資料の会話文は対話構築型（dialogue construction）のDCTであり、場面ごとに、発話行為の内容および相手との人間関係を明示した上、被験者に会話文の空欄になっている部分を補い会話を完成させるよう指示した。以下に場面1の会話文を例として示す。場面1の会話文における①は断り発話の本題を切り出す「用件内容」部分であり、本稿では、発話行為の核心となるこの「用件内容」部分に焦点を当てて考察していく。

場面1: 担任のA先生に一日だけの通訳のアルバイトを勧められました。しかし、あなたはその日にアルバイトが入っているので断らなければなりません。A先生とは普段からよく研究の相談や生活の面倒も見てもらっているとても親しくお付き合いしている間柄です。

教員A：〇〇さん、今、ちょっといいかな。

あなた：はい。

教員A：この土曜日に通訳のアルバイトがあるんだけど、時給も良いし、勉強にもなるから是非〇〇さんをお願いしようと思っているんだけど、どう？

あなた：ありがとうございます。でも、あのう、土曜日ですか？

土曜日は①_____。

教員A：あ、そう。喫茶店のバイトか。じゃ、仕方ないね。ほかの人探してみるよ。

あなた：本当に、今度、チャンスがあれば是非・・・。

以上のような調査に基づき、以下分析を行う。

4. 量的分析の結果と考察

4.1 量的分析の結果

ここでは3. の調査の結果から文末表現の表現形式の使用状況と特徴を被験者別に見ていくことにする。断り発話の「用件内容」部分における各表現形式の使用頻度と文末表現に占める使用率を被験者別にまとめたものが、図1、図2、及び図3である。

まず、図1のJNSの使用状況から見ていく。

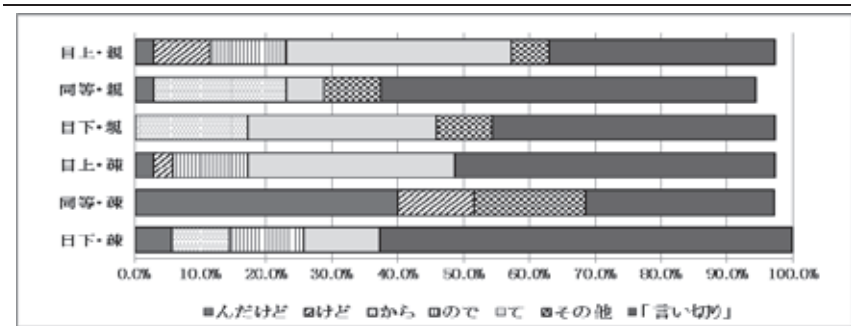


図1 JNSによる断り発話の「要件内容」部における各表現形式の使用率

	目上・親	同等・親	目下・親	目上・疎	同等・疎	目下・疎
んだけど	2.9%	2.9%	0.0%	2.9%	40.0%	5.7%
けど	8.6%	0.0%	0.0%	2.9%	11.4%	0.0%
から	0.0%	20.0%	17.1%	0.0%	0.0%	8.6%
ので	11.4%	0.0%	0.0%	11.4%	0.0%	11.4%
て	34.3%	5.7%	28.6%	31.4%	0.0%	11.4%
その他	5.7%	8.6%	8.6%	0.0%	17.1%	0.0%
「言い切り」	34.3%	57.1%	42.9%	48.6%	28.6%	62.9%

*無回答が含まれるため、両表現の合計が100%にならない場合がある。以下の図・表においても同様。

図1にみられるように、JNSは同等の親しい関係と目下の疎遠な関係に「言い切り」表現をより多く選択し、その他の関係においては「言いさし」表現を多く選択している。全体的に人間関係の相違によって「言いさし」表現と「言い切り」表現の使い分けを行っており、相手との人間関係に合わせた接続助詞の選択を行っていることが推察される。

「言いさし」表現に使われる各々の接続助詞の使用状況を人間関係別に見ていくと、目上の教員からの「アルバイト」の紹介を断る場面において、親しい相手にも、疎遠な相手にも「て」の使用が最も多く、それぞれ34.3%と31.4%で、次に「ので」（親疎ともに11.4%）が多用されている。そして、相手が同等の関係である場合、「親しい友人のアルバイトの交替依頼を断る」場面と「疎遠な同級生のパーティーの誘いを断る」場面とを比較してみると、親疎の間における表現形式の選択に顕著な差が現れる。つまり、親しい相手には、「から」の使用が最も多く全体の20.0%占めるのに対し、疎遠な相手には「から」の使用が1例

も見られない。一方、親しい相手には「んだけど」をわずか2.9%しか使用していないのに比べ、疎遠な相手には40.0%も使用している。これに「けど」の11.4%を合わせると計51.4%、すなわち半数を超えて「けど類」¹⁾を使用したことになる。最後に、相手が目下の後輩である場合、「レポートの添削依頼を断る」場面において、親しい相手には「て」を28.6%と最も多く使用し、次に「から」を17.1%使用している。これは疎遠な相手に同じ使用率で最も多く使用された「て」と「ので」の11.4%、それに続く「から」の8.6%を大きく上回る結果となった。また、親しい相手には「んだけど」、「ので」の使用例が見られないのに対し、疎遠な相手にはそれぞれ、5.7%と11.4%の使用が確認でき、接続助詞の選択に違いがあることが分かる。

上記のJNSによる断り発話の「用件内容」部に使用される「言いさし」表現の特徴をそれぞれまとめると以下のようなようになるだろう。

1. 相手との人間関係の相違によって「言い切り」表現と「言いさし」表現を選択している。
2. 「んだけど」は同等の疎遠な関係において顕著に多く使用されている。
3. 「ので」と「から」の使用に関しては人間関係による使い分けを行っている。「ので」は目上（親・疎）及び目下の疎遠な関係に、「から」は同等の親しい関係及び目下の親しい関係に使われる。
4. 「て」は、主として目上（親・疎）の関係及び目下の親しい関係に使用される。

次に学習者のJFLの使用状況を図2に基づいて見て行くことにする。

図2に見られるように、JFLはJNSとは異なり、人間関係の相違にかかわらず、「言いさし」表現を多く選択する傾向がみられる。そして、「言いさし」表現は全体的に表現形式による偏りはみられず、どの人間関係にあっても、いくつかの表現形式が選択されるという「分散型」の使用傾向が見て取れる。

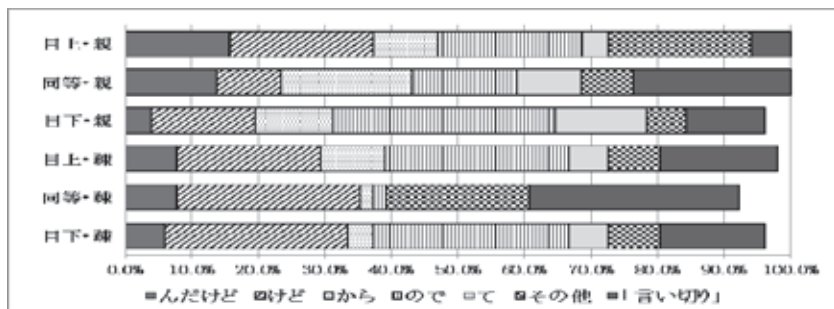


図2 JFLによる断り発話の「要件内容」部における各表現形式の使用率

各々の表現形式の使用状況を人間関係別にみると、まず、相手が目上である場合、親しい相手には「けど」「ので」「その他（の表現で終わる「言いさし」表現）」の3つがいずれも21.6%の使用率で最も多く使用され、次に「んだけど」が15.7%使用されている。一方の疎遠な相手には「ので」が27.5%と最も多く使用され、次に「けど」が21.6%使用されている。そして同等の関係において、親しい相手に対しては、「から」が19.6%と最も多く、次に「ので」が15.7%、「んだけど」が13.7%使用されている。一方の疎遠な関係では「けど」が27.5%と最も多く、「その他」の表現が21.6%使用され、「けど」と「その他」の表現に集中している。これは親しい関係に使用される「けど」の9.8%、「その他」の7.8%を大きく上回る結果となった。さらに目下の相手の場合を見ると、親しい相手には「ので」が33.3%と最も多く使用され、次に「けど」（15.7%）、「て」（13.7%）が続いている。疎遠な関係の相手には同じく「ので」の使用率が29.4%と最も高く、次に「けど」が27.5%使用されている。JFLは目下（親・疎）の相手に使用する「ので」、「けど」の使用率が高いが、JNSは目下の疎遠な関係でのみ「ので」を使用し、「けど」は親・疎のいずれの場合にも用いられておらず、両者は異なっ

た選択を行っていることがわかる。

JFLによる断り発話の「要件内容」部に使用される「言いさし」表現の特徴を、表現形式別にまとめると以下のようになる。

1. 相手との人間関係に左右されることなく、「言い切り」表現よりも「言いさし」表現をより多く選択し、接続助詞の選択に関しては「分散型」の選択傾向がみられる。
2. 同等の親しい関係を除けば、「けど」が「んだけど」より優先的に選択される。
3. 同等（親・疎）の関係を除けば、「ので」が「から」より優先的に選択される。
4. 「て」は目下の親しい関係で最も多く使用される。

次にJSLの使用状況を図3から見ていく。

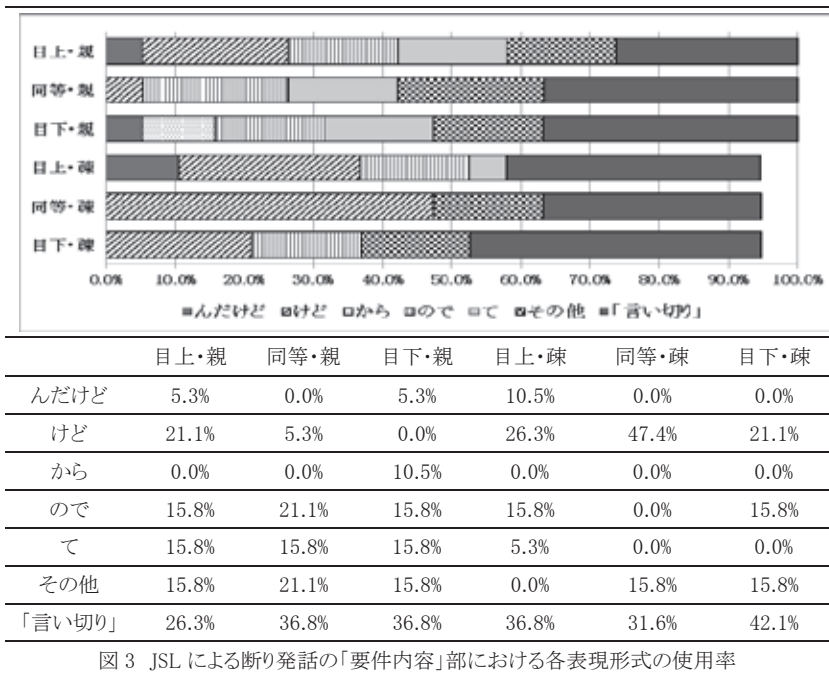


図3 JSLによる断り発話の「要件内容」部における各表現形式の使用率

図3に見られるように、使用率の差はあるものの、JSLはJFL同様に断り発話の文末表現の選択において「言いさし」表現を「言い切り表現」よりもより多く選択していることが分かる。

人間関係の相違別に見ていくと、相手が目上の関係である場合、親疎にかかわらず最も多く使用されたのは「けど」であり、親しい関係には21.1%、疎遠な関係には26.3%使用されている。そして、親しい関係に「て」を15.8%使用しているのに対し、疎遠な関係ではわずか5.3%しか使用せず、「て」の使用率に開きが確認される。また、「んだけど」に関しては、親しい場合には5.3%だが、疎遠な場合には10.5%と親しい場合より多く使用している。ただ、親疎ともに「から」の使用は見られず、「ので」はともに15.8%使用していることが共通している。そして相手が同等である場合、疎遠な相手には1例も見られなかった「ので」「て」を親しい相手にはそれぞれ21.1%、15.8%も使用している。ただその一方で疎遠な相手には「けど」を47.4%も使用し、親しい相手にはわずか5.3%しか使用していない。目下の相手の場合、親しい相手には「て」「ので」「その他」の三つの表現をそれぞれ15.8%使用し、次に「から」を10.5%使用している。疎遠な相手には、親しい相手に1例も使用が見られなかった「けど」を21.1%と最も多く使用し、「ので」と「その他」の表現を15.8%使用する一方、「から」の使用例は見られなかった。

以上のJSLによる断り発話の「用件内容」部に使用される「言いさし」表現の特徴を表現形式別にまとめると以下になるだろう。

1. JFLと同様、相手との人間関係にかかわらず「言いさし」表現をより多く選択している。
2. 目下の親しい関係を除けば、「けど」は「んだけど」より優先的に選択される。目上の疎遠な関係の相手および同等で疎遠な関係には「けど」が最も多く使用される。
3. 「ので」を「から」より顕著に多く選択し、「から」は目下の親しい相手にのみ使用される。
4. 「て」は親しい関係全般に使用される。

これまで見てきたように、JNSと学習者による文末表現の表現形式の使用率の分布から、両者の文末表現の選択に共通点が見られる一方、人間関係が異なることによるいくつかの相違点も現れた。次節では、この点も含め、調査結果について考察していく。

4.2 考察

4.1で見られた結果を被験者別にまとめて示すと次のようになる。

結果1：全体的使用傾向として、JNSは相手との人間関係が異なることによって、「言い切り」表現か「言いさし」表現のいずれかを優先的に選択している。学習者（JFL、JSL）は、人間関係の相違にかかわらず「言いさし」表現をより多く選択している。そのうち、JFLは「言いさし」表現の接続助詞の選択に際して、いくつかの表現を選択するといった「分散型」の傾向がみられる。

結果2：「言いさし」表現の「けど類」に関しては、JNSは、他の関係に比べ同等の疎遠な関係において顕著に多く使用されている。JFLは、同等の親しい関係を除けば、「けど」が「んだけど」より優先的に選択される。そして、JSLも、目下の親しい関係を除けば、「けど」は「んだけど」より優先的に選択される。

結果3：「言いさし」表現の「から」と「ので」に関しては、JNSは、人間関係による使い分けを行っている。目上（親・疎）および目下の疎遠な関係には「ので」を使用し、同等の親しい関係及び目下の親しい関係には「から」を使用している。JFLは「ので」と「から」の両方を使用するが、同等（親・疎）の関係を除けば、「ので」が「から」より優先的に選択される。そして、JSLは、「から」を目下の親しい相手のみ使用し、それを除けば、JFLと同様に「ので」を「から」より優先的に選択している。

結果4：「言いさし」表現の「て」に関しては、JNSは、主として目上（親・疎）の関係及び目下の親しい関係に用い、JFLは目下の親しい関係に、JSLは親しい関係全般により多く使用するといった相違点が示された²⁾。

まず、結果1について検討する。

断り発話の「用件内容」部において、JNSは、同等の親しい相手と目下の疎遠な相手に「言い切り」表現をより多く選択し、その他の関係には「言いさし」表現を選択した。相手との関係が親しい場合には「同等」の相手に、そして相手との関係が疎遠な場合には「目下」の相手に「言い切り」表現を有効的なストラテジーとして選択していることが分かる。

JNSは、同等の親しい関係では「言い切り」表現を57.1%使用したのに対し、疎遠な関係ではわずか28.6%しか使用されず、親疎関係に約30%の差異が確認できる。相手との関係が親しい場合に、同等（友人）相手には心的負担を感じる

ことが最も低いので、その相手の依頼を断る際には発話意図が明確に伝わる「言い切り」表現を選択していることが考えられる。他に、目下の疎遠な関係には「言い切り」表現を62.9%使用し、一方の親しい関係では42.9%使用し、親疎関係が異なることによって使用率に20%の開きが観察できる。相手との関係が疎遠であれば、力関係が目上の教員と普通の接触頻度が高い同等の関係にある同級生に比べ、目下の後輩の依頼を断ることは、比較的心的負担を感じない関係であることが考えられる。JNSは、断り発話において、相手との距離及び心的負担の度合いによって「言いさし」表現か「言い切り」表現かの選択を行っているのだと推察される。

このようにJNSは相手との人間関係によって、「言いさし」表現か「言い切り」表現のいずれかを選択しているのが分かった。それに対し学習者（JFL、JSL）は、相手との人間関係の相違にかかわらず「言いさし」をより多く選択しているという点でJNSと異なっている。

断り表現とは、相手からの申し入れ、要求、要望について受け入れられない、応じないという態度を示す場合に用いられる表現であるため、相手にとって好ましいことではない（彭2004:121）。したがって相手に反感をもたれないためには、相手に配慮を示す適切な表現を用いるのが好ましく、そうでないと人間関係が崩される可能性が高い。中国人の対人コミュニケーションにおいて依頼行為はそれほど遂行しにくいことではない（張1993、浜田1995）のに比べ、自分のことを信頼して頼んできた相手の依頼をはっきり断る行為は、その人の面子を脅かすことになり、たとえ配慮の要らない「目下」の相手の依頼であっても、それを断ることはかなり心的負担を感じる行為である。日本人と中国人の待遇行動をポライトネス理論の視点から考察している母（2005）は、断り場面において中国人は日本人より高いレベルのストラテジーを好んで使用することが多いと指摘している。母（2005:45）によると、親しい友人、後輩に対しては「言外にほのめかす」（本稿における「言いさし」表現に相当する）ストラテジーを用い、目上の人、特に先生などには「断らない」ストラテジーを頻繁に使用している傾向が見られたという（同上）。そのため「言い切り」のような直接的な断り表現の使用は困難であり、相手との良好な人間関係を築くための表現が必要となる。文末を言いきらない「言いさし」表現は、自分の意見が相手にストレートにぶつかることを避けたものであり、言わば相手に対する遠慮であり、一歩下がって相手を立てていることになる（中山1985:65）。その結果「言いさし」表現が選択されやすくなっているのではないだろうか。日本語学習者が産出した言語表現は、文法的に問題がない場合でも、母国文化の規範やその文化に存在する制約から逃れることはできず、それに反した言語表現は不自然なも

のと判断されることがある。尾崎(2008:1-3)では、異文化間コミュニケーションにおける言語行動上の違いはそれぞれの国の文化や習慣の違いに起因するところが多く、中でも重要なものとして、それぞれの国において一般的であると意識される物理的あるいは社会的・心理的な対人距離の取り方の違いであることが指摘されている。中国人日本語学習者が断り発話において、相手との関係を維持する上での有効なストラテジーとして「言いさし」表現を用いて、断る意志を婉曲的に表明しているのは、中国の社会文化における相手との人間関係を認知する上での規範や行動様式から影響を受けていると考えられる。

次に、結果2の「けど類」について検討する。

本稿では「けど類」に関して「んだけど」と「けど」の二つの形式に分けて考察した。「けど」の前に「のだ(んだ)」が付加されるか否かによって、話し手の伝えようとする意図は異なるという考慮からである。李・吉田(2002:236)は、「んだ+けど」の組み合わせが発話末に現れる場合、「一方では話し手の表したい感情や気持ちを一通り表し、もう一方ではあまり強く直線的にならないようにやわらげる。」という二つの機能を持つとし、「この二重的な働きにより話し手は自分の気持ちを過不足なく適切に表すことができる」と述べている。

本稿の考察結果において注目すべきことは、JNSは上下、親疎関係の中で唯一同等の疎遠な相手に「けど類」【「んだけど」(40.0%)、「けど」(11.4%)】を顕著に多く使用しているという結果である。同等の疎遠な関係というのは、親しくはないが、普段接触する頻度が比較的高く、同時に円滑な人間関係を維持する必要性が高い関係である。したがってほかの人間関係に比べ、より間接的に断りの意志を伝えているのではないかと考えられる。JFLは同等の親しい関係において、またJSLは目下の親しい関係においてはそれぞれ、「んだけど」を「けど」よりやや多く使用しているが、JFL、JSLは基本的に「けど」を「んだけど」に比べ優先的に選択している点で共通している。しかしながら、同等の疎遠な相手に対しては、JSLとJNSは表現形式の選択が「けど類」及び「その他」に集中しているといった使用傾向が共通性として示された。これは、JSLはJFLに比べると、より自然な習得環境におかれ、JNSと同様に同等の疎遠な相手に対し、他の人間関係よりも配慮すべきであるということを学習したからである。しかし、JNSは、「んだけど」を40.0%、JSLは「けど」を47.4%というように、表現形式の選択が異なっていることも観察できる。これは、JSLが「のだ(んだ)」なしの単独の「けど」では、「話し手の感情や気持ちが十分出てこない」(李・吉田2002:234)ということに気づいていないからではないかと考えられる。単独の「けど」のこのような性質を認識していないということが、JFL、JSLの両

者ともに、「けど」の使用率が「んだけど」のそれより高くなっている理由なのではないだろうか。文末における「けど」は適切に使用すれば確かに発話を和らげるなど、円滑に会話を進めさせる上で重要な働きを果たすことができる。しかし使用状況と場面によっては、相手に押し強さを感じさせたり、相手を問いただすようなニュアンスが含まれ、「かなりきつい調子を帯びた発言になる（佐藤1994:24）」可能性が生じる。JSLによる同等の親しい相手への「けど」を用いた断り表現は、コミュニケーションをスムーズに進めるという積極的な役割を果たす一方で、使用状況と場面によっては逆に円滑な対人関係を阻害してしまう可能性も生じさせる。これまでの日本語教育の現場では「んだけど」と「けど」の区別を明示的に示すことは少なく、もっぱら「けど」の持つ語気のやわらげや婉曲、丁寧などといった側面だけを強調したことによって、学習者が「けど」の機能を過大評価しているのではないかと思われる。

最後に結果3の「ので」と「から」の使用について検討する。

JNSは、目上（親・疎）、同等の親しい関係には「ので」を、目下の親しい関係には「から」だけを選択するといった、人間関係による「ので」と「から」の使い分けを行っていることが分かった。目下の疎遠な相手に使用した「言いさし」表現をみると、その他の人間関係に比べ「けど類」の使用が顕著に少なく、「から」「ので」「て」に集中している。具体的には「から」を8.6%、「ので」を11.4%使用し、両表現の間にはそれほど顕著な差は見られなかった。「から」と「ので」はともに原因と理由を表す接続助詞であるという共通点がある。目下の疎遠な関係においては、原因、理由を表す接続助詞を選択することによって、断りの理由をはっきり述べていると言えるのではないだろうか。

それに比べ、JFLとJSLは「ので」と「から」の両方を選択し、全体的に「ので」が「から」より優先的に選択される傾向が確認できた。

これは、「断り」行為を構成する「弁明」（藤森1995の用語：誘いを断る理由、原因、言い訳などの発話）意味公式の節末および文末にみられる表示マーカーとして働く接続助詞の使用において、中国人日本語学習者は、親疎及び目上目下に対し、「から」「ので」の二つを使い分けし、日本語母語話者は、親しい相手には「から」、目上には「ので」の使用が圧倒的に多いという、藤森（1995）の結果と部分的に共通していると言える。

ところで、一般的に原因・理由を表すとされる「から」「ので」は、会話する相手によって現れ方に一定の傾向がみられるという（谷部1999、2002）。谷部（1999、2002）は、職場における自然談話を資料とし、あらたまった場面（会議・打ち合わせ・指導）とくつろいだ場面（休憩時や昼食時などの雑談）にみ

られる「から」と「ので」の分析を行っている。それによれば、「ので」は「あらたまった場面」に多用され、「から」は接触度の比較的高い関係にある相手との会話場面、及び非常にくつろいだ場面では多用されるという。つまり日本語の会話において「から」と「ので」は、ただ文法的に原因や理由を表すだけでなく、会話の場面や相手への配慮とも密接に関わり合う待遇表現である（谷部1999:153）と言える。「から」は「親しさ」（藤森1995）を表す語用論的機能を持っている一方で、「事態を自分勝手に当然視するニュアンスになってしまい、いささか失礼な表現になる（白川2008:7）」といったマイナスの心的態度を表すこともできる。断り発話のような相手への期待に沿えないことを表明する場面において、目上や疎遠な相手に「から」を使用することによって、相手を非難するような響きを持つことがあり、相手に不快感をもたらし、結果的にコミュニケーションの進行を阻害する可能性が出てくる。そして、「ので」は確かに断りの意志を丁寧に、婉曲的に示すことはできるが、従来から言われているように「ので」は「から」に比べ、物事を客観的に述べる機能が強いいため、親しい相手に「ので」を使用することによって相手との人間関係に距離が生じてしまう。

日本語母語話者は、上述した待遇表現として機能する、「言いさし」表現の「から」「ので」に関する語用論的知識を踏まえた上で両表現の使い分けを行っていることが考えられる。

ところが、本稿の考察結果で分かったように、中国人日本語学習者は、「から」と「ので」の両表現を選択しており、また「ので」を「から」に比べ優先的に選択している点でJNSと異なっていた。その違いを生み出す要因は色々考えられるが、母語の中国語による影響と日本語の教科書における扱われ方に起因するところが大きいのではないだろうか。

日本語における「から」と「ので」は、中国語では「因为(yin wei)・由于(you yu)」という表現に相当するが、中国語の「因为・由于」には、日本語と同じような待遇表現としての機能は存在しない。さらに、日本語の「から」「ので」といった接続助詞が文末に用いられることによって生じる何らかの対人配慮を表す機能を、中国語では、「有点儿」（ちょっと）、「一点儿・一下」（ちょっと～する）あるいは、文末に相手への意思を問いかける「好吗？可以吗？行吗？（いいですか？よろしいですか？）」などの表現が担っている。もっとも、中国語における「因为・由于」は「～なので、～だから」を意味する「连词（接続詞）」であり、「所以(suo yi)」といった結果を表す表現を受け、因果関係を表す複文を構成し、「～なのは、～だから」の意味を表す。したがって、「因为・由于」は複文の従属節に前置されて、原因・理由を表し、「所以」は主節に前置し結果を表す

ため、日本語と同じく文末に用いられることは不可能である。このような中国語と日本語における両表現形式の形式と意味の不一致に加え、「言いさし」表現として使われる「から」と「ので」の有する待遇表現としての二面性を、JFL、JSLは十分に認識していないが故に、人間関係によらず「ので」と「から」の両表現とも使用してしまい、目上の関係にも「から」を使用し、親しい相手にも「ので」を使用するといった結果が導かれたのではないだろうか。

また、単に母語の影響のみならず、日本語教科書における「から」「ので」の扱われ方にも一定の影響を受けているように思われる。中国で出版されている日本語教科書の『中日交流標準日本語初級1, 2』（人民教育出版社、光村図書出版株式会社編1988）、日本で出版されている教科書の『みんなの日本語初級Ⅰ, Ⅱ』（スリーエーネットワーク1998）を選定し、この二つの教科書における「から」「ので」の導入状況を見てみると、いずれも「から」が「ので」より先に導入され、初級の後半に提示されることが分かった。以下具体的な扱われ方をみていく。

『中日交流標準日本語』では、『初級1』の第13課で、まず「から」が導入され、「ので」は、『初級2』の第28課に導入されているが、いずれも原因、理由を表す「から」と「ので」に注目しており、待遇表現としての機能には触れられていない³⁾。なお、会話例として「～から」で終わる「言いさし」表現が会話文の中に現れているにも関わらず、「言いさし」表現の扱われ方に関する記述は見られなかった。当然なことだが、中国人日本語学習者は、教科書における接続助詞に関する解釈だけでは、その背後に潜む対人配慮の機能を読み取ることは困難であろう。

それに対し、日本で出版されている『みんなの日本語初級Ⅰ, Ⅱ』の中国語バージョンの解説書には、「ので」の対人機能を配慮した記述がみられる。そこでは、「～から」と同様に「～ので」も原因、理由を表す。「～から」は主観的に原因・理由を表すのに対し、「～ので」は客観的に原因・理由を陳述し、一般的に認識されている因果関係を表す。そのため、話者の主観的な考え方を抑制し、聞き手への影響力が弱い。したがって、依頼、許可を求める際の理由及び婉曲な弁解を表す場合によく用いられる（筆者訳：pp. 87）」と説明されている。以上の記述から、日本で出版されている教科書のほうが、「ので」の待遇レベルに、より配慮していることがわかる。ただし、中国で出版されている『中日交流標準日本語』と同様、「言いさし」表現として使われる「から」「ので」に関する記述は見当たらなかった。

日本語教科書におけるこれらの待遇表現としての観点が欠けた記述によって、学習者は、「言いさし」表現として使われる「から」「ので」の対人機能を習得

できず、原因、理由を表すという意味レベルの習得にとどまってしまう、語用レベルでの適切な表現を習得するのが困難となってしまうのだと考えられる。

5. まとめと今後の課題

DCTを用いた本稿の調査結果から、まず、中国人日本語学習者は断り発話の「用件内容」部において「言いさし」表現を選択し、JNSは相手との人間関係が異なることによって「言いさし」表現と「言い切り」表現を使い分けていることが全体的特徴として確認できた。JNSは、また、人間関係の相違に応じた表現形式の使い分けを行っているのに対し、JFLにはいくつかの表現形式を使用するという分散型の使用傾向が見られた。JFLは形式的にはその違いを十分認識しているのだが、各表現形式がコミュニケーションにおいて果たす役割に関する理解が不十分であり、人間関係に応じた表現形式の選択が日本語母語話者とは異なってしまう、「運用」において期待通りの結果を得ることができない。また、JFLとJSLの間には、文末表現の選択傾向に共通点、相違点がともに現れており、そこには学習環境の違いによる影響が考えられる。外国人学習者の語用論的能力の習得に影響を与える要因の中で、学習環境は特に重要であると言われている（清水2009:227）ように、外国語環境か第二言語環境かという異なる学習環境は言語表現のみならず人間関係の認知にも影響を与えていることが推察される。ただし、第二言語学習環境が中国人日本語学習者の文末表現の使用を促進しているのかどうかについてはさらに検証を行わなければならない。

今後は、本稿で詳しい考察を行うことのできなかつた、「て」「その他」⁴⁾の表現で終わる「言いさし」表現に関する検討を含め、被験者の人数を統一し、範囲を拡大したうえで、社会属性や性差などによる偏差も合わせて考察するなど、調査・分析方法をさらに精緻化させ、また質的分析を行う必要がある。日本語教育における会話能力の向上が注目されているなかで、円滑なコミュニケーションのために、言語表現のみならず、いかにその背景となる人間関係の認知という観点を教育の現場に導入することができるのかを考えていきたい。

注

- 1) 従来の研究では「けど」「けれども」などの表記が見られる。本稿ではこれらの接続助詞で終わる文には丁寧さ等差別的な違いがあることは認められるが、意味的には近いものであると考えられることから、「けど類」で表記を統一することにする。
- 2) 「言いさし」表現の「て」に関しては接続助詞としての本来の用法が複雑な

ため、大量の資料に基づき、詳細に考察を行わないといけないが、次の機会に譲りたい。

- 3) 「から」については、「(日本語訳)「から」は「～です」「～ます」に後続し、その前の部分は原因、理由を表し、後ろの部分は結果を表す。(pp. 199)」とし、「ので」に関して類似した記述がみられる。
- 4) 本稿において観察された「その他」の表現で終わる「言いさし」表現には、「今日は…」、「休みの日？」などといった名詞文、疑問文などいくつかの形式が確認されたが、中でも「ちょっと」の使用が目立って多い。

参考文献

- 池田裕(1995)「文末表現の重要性」『月刊言語』24(13). 128-129
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662. 27-42
- 母育新(2005)「ポライトネスの理論から見た日本人と中国人の待遇行動—質問紙調査の結果からの考察」『言語と文明』3. 39-51
- 岡田安代(1991)「日本人はなぜ文末まで言わないのか?—会話を成り立たせる「共話」の原理—」『月刊日本語』4(1). 9-13
- 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に」『日本語教育』79. 53-63
- 柏崎秀子(2001)「談話の展開と表現が聞き手の印象評定に及ぼす影響—意図・情動の理解のための『実験語用論』の試み」『東京工業大学留学生センター年報』5. 49-54
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわばり理論—言語の機能的分析』大修館書店
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也編集(2002)『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 柴田庄一・山口和代(2002)「日本語習得における人間関係の認知と文化的要因に関する考察—中国人および台湾人留学生を対象として」『言語文化論集』24(1). 141-158
- 清水崇文(2009)『中間言語語用論概論』スリーエーネットワーク
- 鮫島重喜(1998)「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程—中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」の場合」『日本語教育』98. 73-84
- 白川博之(2008)「文型としての「言いさし」」、『広島大学日本語教育研究』18. 1-8
- (2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版

- 張拓秀 (1993) 「依頼表現の日中対照研究」『講座日本語教育』28. 157-177
- 中山治(1985) 「「ぼかし」の構造—日本語の表現心理」『月間言語』Vol. 1No.12, 大修館書店. 64-69
- 浜田麻里 (1995) 「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略」『日本語学』14 (10) . 69-75
- 藤森弘子(1995) 「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・日本語学習者の場合—」『日本語教育』87. 79-89
- 古田暁監修 (1996) 『異文化コミュニケーション「改訂版」』有斐閣選書
- 彭飛 (2004) 『日本語の配慮表現に関する研究—中国語との比較研究における諸問題』和泉書院
- 水谷信子(1989) 『日本語教育の内容と方法：構文の日英比較を中心に』アルク
——(1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』4月号Vol. 12明治書院4-10
——(2001) 『続日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 峯布由紀(2008) 「文末表現の習得における自然習得と教室習得の異同」坂本正他編『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』スリーエーネットワーク. 120-128
- 谷部弘子(1999) 「「のつけちゃうからね」から「申しておりますので」まで」, 現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』, ひつじ書房, 139-154
——(2002) 「「から」と「ので」の使用にみる職場の男性の言語行動」, 現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房. 133-148
- 李徳泳・吉田章子(2002) 「会話における「んだ+けど」についての一考察」『世界の日本語教育』12. 国際交流基金日本語国際センター. 223-237

